

江戸の環境保全活動

トビー・ローランド

序文

現代の東京湾を目のあたりにしたら、「そこはもともと非常にきれいな街だった」とはとてもし難いであろう。むしろ周辺の工場や濁っている海水やスモッグを見て“日本人は環境保全などのことなど全然気にしない民族”という意見が出るであろう。60年代以来、日本は捕鯨や森林を伐採する活動で散々批判された。経済の高成長の代わりに公害の事件でも有名になった。しかし、意外にも伝統的に、日本は世界でも有数の環境保全先進国であったと言われている。実は、日本は世界で一番最初に、ある程度の環境保護をする意識が生まれた国といっても過言ではないであろう（環境保全する意識というのは、環境破壊をせずに、環境をそのまま維持する意欲）。徳川家康の時代以前にも存在したかも知れないが、本文は江戸時代の環境保全に対する活動を中心に進めて行きたい。勿論、江戸時代の日本は只の基本的な封建制度であった。当時の政府が最も権利があり、又厳しかったので当時の政策で現代の問題の解決策にはならないであろうが、この題材について研究すれば、現在の問題の源流が明らかになるであろう。

江戸：川と緑の多かった大都市

当時の環境保護活動で目立つのは当時の都、江戸であった。意外なことに、当時の江戸は世界で一番大きな街であり、その人口は百万人をも超えた。。ところがこの後しめす様に江戸の川は澄んでいたし、鳥も多く、又緑地空間が広く、自然の観点で理想的な大都市であったといえる（ここで私のいう`大都市`は高層ビルが立ち並びバスや地下鉄交通手段が発達している現在の様な都市を指しているのでは勿論ない）。

江戸の川について調べると、現代と全く違う状態が分かってくる。江戸の隅田川などは庶民も貴族も春は花見夏は花火見物へ行っていたに自然と桜の美しいところであった様で、「月も朧に白魚のカガリもかすむ春の宵」と歌舞伎の名ぜりふにある様に、白魚も住める程澄んだ水であった（白魚は水質汚染度BOD3ppm以下の清水にしかすめない魚である）。当時のヨーロッパとアメリカの大都市の川と比べると、その稀さがきわだつ。1858年の夏に起こった「グレート・ステイंक」（大臭気）という事件でロンドン一帯はテムズ川に発生した悪臭で悩んだ。ウエストミンスターにあった議会も移住しないといけない様になってしまった。ところが、江戸の政府も民も川を注意深く守っていた。川の清潔さの理由は大体二つに分けることが出来るであろう。一方、江戸は低い地方で井戸などを掘ったらその水に塩気があるので、川の水を飲み用水として使っていた。それゆえに、

掘ったらその水に塩気があるので、川の水を飲み用水として使っていた。それゆえに、川にゴミを捨てるなどということが厳しく禁止されていた。他方、当時の下水などは川に流れなかった。なぜなら、人間と動物のフンは肥料として格好の望まれた資源であって（健康に悪影響を及ぼすおそれから、人間のフンはもう使われていない）、その全ては江戸周辺の農民に売られていた。下水を商品にしていた問屋もあった。なおさら、たまに公衆便所から肥料を盗まれたという事件まであった。

前述の様に江戸という街は緑が特徴であった。天保期（1830-1843年）、地図の示すように、江戸城を中心にして、8 kmの圏を書いたら、その中の緑の空間が約43%であって、どこの大都市と比べても結構広いだらう。当時、江戸の中心はほとんど武家地で庶民が勝手に立ち入るところではなかった。それゆえか当時の神社は現代の公園と同じ様な役割を



果たしていた。その上、町家地にも、各町に40丈（約121平方）の空間があったが、この土地を緑地といっても間違いないであろう。当時の作家によると庶民は自分の家屋と道路を庭として使っており、そこに樹木や植物を生えていた。八代将軍吉宗の時から、公園と行楽地に対して真の積極的な態度を見せて、「四民遊覧の地」を造った。例として、飛鳥山、隅田堤川、品川御殿山、小金井桜堤に庶民が楽しめるように桜などを植樹させた。染井の有名な植木屋もこの時に設立された。

江戸は環境のきれいな街で、従って野性の鳥も少なくなかった。この鳥を追いかけるのは庶民に対して禁止されていたので、人間による恐れ

江戸の緑被地（天保期 1830-1843年）

がほとんどなかったそうである。ペリー氏の船員が江戸湾で時間をつぶしていた時、その軍艦へ向って来た海鳥に発射して遊んだが将軍の役員はこれを見て非常に嫌がり、当日の日米同盟で、日本の海鳥を娯楽としての殺しを禁ずるといふ箇条が載っていた。これはおそらく世界始めの環境保護に関する箇条のある国際同盟であろう。

現代、日本のゴミという問題はいよいよ関心を集めている。資源用ゴミと燃えるゴミにちゃんと分けても、日本のビニール・バッグなどは永久までの荷物になった。しかし、江戸時代から残っているゴミの量は意外に少ない。この原因を調べると、江戸の町人はほとんど

ゴミを作らなかったからである。又は、当時の再生という作業は今日のより随分大事であった。その中で一番目立っていたのはおそらく和紙の再生産業であった。勿論、現代も洋風紙も再生されているが（すでに少なくなかったちり紙交換は最近減少しているようだ）、当時、緒という樹の枝から作られていた和紙の全てが3回も4回も再生されていた。金属も特に再生されていたけど、ロウソクも傘も何回も使われていた。台所のゴミもカマドからの灰がらも、美容院からの切った毛も肥料として使われていた。当時のロンドンに大変な問題になっていた馬のフンは江戸のにおいては価値のあった肥料であった。馬の一匹の一年間分のフンは三両で売られていたそうだ。

江戸以外の環境保護活動

明治時代になると、日本の森林が多く大規模に伐採されたが、それ以前は厳しく禁止されていた。あるところでは、「木一本首一つ」とも「枝一本首ひとつ」ともいう法律もあった。森林と雨の関係がまだまだ解明されていなかったが、水の流れと浸食の関係についてはほぼ明らかにされていた。日本の農業の大部分は水田で行っていたから、川に土砂などが入れば稲にすぐ悪影響が及ぼされる。魚釣りも大切であったから、海が川から流された土砂で濁ったら大きな問題になる。それで多くの藩で大名も一般の人も森林を守っていた。農民に対して、山林が一番大事であった。その樹を伐採したら、治水ができなくなり、雨になったら耕地の土地が流される可能性もあった。漁師に対しては特に「魚付き林」という森林が大事であった。それは多種類の魚を集め、魚の繁殖と保護に非常に効果のある海岸近くの森林であった。既にあった海岸の辺りの林も保護をしていたし、積極的に植樹林をしていた藩も多かったらしい。秋田県でこういう浸食の問題が関心を集めた。当時、秋田県の農業は飛砂による被害を受けていた。280キロメートルにも及ぶ海岸から強風に飛ばされた砂が水田などにたまるので、毎年、春の一番最初の仕事はそれを掘り除くことであった。

そして1682年、野呂理左衛門の堤言で黒松の植樹を始めた。つぎの50年間の間に86万本の木を植えて、66村、4000ヘクタールの田畑が飛砂の被害から守られるようになった。江戸時代の植樹活動で有名な指導者で琉球列島のサイオン（1682-1761年）もまた環境を保護する人物であった。1734年に完成した「農務帳」という本で自分の考えを挙げ、「土地の保全」という章で、土地の浸食と森林の伐採との関係が書いてある。沖縄の土地が壊れやすいという特徴をよく理解していて、等高線に沿うような溝を多く掘ったり、水や泥が一か所に集中して流れないようにしたのである。開発と余計な伐採をとにかく禁じて、竹草を燃料として使うのもやめさせた。海岸に森林を大規模に植えるようにした。

この全国にあった森林は動物の天下で騒がしかったそうである。なぜなら、山の森林は神の住んでいるところだと信じられていて、一般の人は狩りに入らなかった。又、多数の森林においてそれは、一般の人に対して狩りを禁止してあった。例えば、江戸の周囲の鷹

狩り地がよい例である。鷹狩りという趣味がもともと般のことで、約700AD、貴族に制限された。その結果は、江戸時代大名が、自分が鷹狩りを楽しめように鳥獣の多かったところを保護していたことからわかる。当然の様に、その中の一番広い地方縄張りを徳川家が保護していたのであった。徳川家康の時、上総国東金（千葉県）、相模国中原（神奈川県）又は埼玉県の色々な地方を含む広い地域が保護地区であった。意外にも、その土地が鷹狩りで使われていたが、その獣鳥は現代の国立公園より何倍多かった。その中にはもうあまり見れない種類の鶴、鷺、鷹、朱鷺、鹿と猪も多くいた。当時の動物についての記録はそれ程詳しくないが、全国の野性動物もたくさんいたらしい。一例を挙げると、1749-1750年の間、青森県の八戸というところで「猪飢渴」で3千人の餓死があったが、その猪が非常に多いからという理由からであった。

鉱山と公害：対策

江戸時代の環境保護の一つの活動は鉱山の公害の対策であった。貿易をほとんど禁じていた徳川幕府の鎖国という時代、鉱山以外の産業は輸出出来なかったため、鉱山産業はぐんぐん成長した。従って、鉱山による公害も拡大して、一つの社会問題として関心集めるまでになった。公害による最初の事件は一般に明治時代の足尾銅山のであったと思われるが、それよりだいぶ前に公害事件が多数あった。勿論、当時公害という言葉もなかったが、銅、鉄、銀の鉱山による環境破壊があったことは確かである。この他に、色々例を挙げるとする。前述の様に、日本の農業は水田で行っているので、水の清潔さ、がとても大事であった。鉱山による公害は大体水の質で計測されて、法律のもとに実施された協定が農民と鉱山企業との間に結ばれた。例えば、1829年播磨国多田銀鉱山経営の場合、百姓の田畑を守ろうとする為「村方用水取繕諸入用銀」を出すと同時に、公害をあらかじめ防止する為、鉱山からの排水に特別に留意した協定が結ばれた。公害の例は大体19世紀からであるが、それ以前の例も少なくない。那智山社領の河村は1698年神領の水田が紀州那智鉱山からの悪水を受けた為、那智山では150石分の替地を要求した。時折、悪水が問題になって来た地方で、鉱山の経営期間が冬の間のみ制限された。長期にわたり続いた事件であったが、「備中浜一件」が一つのいい例になるのであろう。元々1778年にも問題になっていたことだが、備中国、備前くにの五カ村の水田にまで公害が及んだのは同地の色々な鉱山企業であった。1845年-1846年の訴えの結果、その企業の経営期間が秋彼岸から春彼岸のみに限定された。

環境保護の源流

江戸時代の環境保護活動とその環境の高い清潔度の源流を調べると、最初にその源流を二つに分けないと明らかにならない。一つは当時の庶民の経済的に苦しい状況で生まれた儉約する態度であった江戸時代の庶民の生活は極めてつらくて、田舎で大勢の餓死はよく

あったことである。それで現代気にせず捨てられるものが当時は資源として使われていた。二つは、いわゆる環境保全意識を源流に起こされたのである。街のし尿を肥料として使うこと、再生産業の盛んであったこと、と公害対策はおそらく当時の経済状況の結果であった。ところが、街の公園も伐採対策も浸食対策も川を守ろうとする活動は環境を保護する目的であったとは間違いないであろう。

前述の通り、当時の指導者の政策がよく保全する意識の表れである。当時の作家もそれを題材にしていた。例えば、安藤ショウエキ（1703-1762年）の「統道真伝」という本で「金属は土や岩石の中であって地面を固め、大地を清らかにし流れを澄まし、人間の皮膚や骨や内蔵を守っている。決して破壊してはならない。採掘を進めて行けば山はもろくなり、空気は濁り、人間は病気がちになる。きれいな水が流れてこず、山は崩れやすく、植物は生えずは砂で埋まる。」こんなにはっきりした例は見つけにくいだが、ある程度環境保全意識のある文は少なくない。

江戸時代の政道も環境保護する活動に影響を及ぼした。徳川家康が建設した封建制度の下で、各藩は一人の大名の権利であって、幕府は藩内の経済にあまり干渉しなかった。それで、適地に適産が発展したそうである。なおさら、環境を壊しやすい産業（例えば、製塩業）も監視されて、資源を使い果たさないように支配された。

日本は他の国々のようにヨーロッパの植民地にならなかったという事実も環境に関係するのであろう。当時の植民地として支配された国々はヨーロッパに厳しくされて、ヨーロッパ人が求めていた資源を大量に生産するために自分たちの環境を破壊するようになった国々は多い。植民地にされた国は、資源の輸出の代わりにヨーロッパの雑草と有害の動物を輸入した。徳川の鎖国という政策のお陰で、日本はこういう問題で悩まされなく日本の風土に適する農業を続けることが出来た。

最後、日本の水田で行われている農業も環境を保全する意識の結果ではなかったが、それも結果としてたしかに環境を保護する大きな一因となった。西洋の田畑は表土がむきだしの為、風により表土がとんだり、又表土の塩化、同じ土地を何十年何百年と使続けることは難しいが、東洋の水田は文字どおり、水におおわれているので同じような状況下においても被害は受けにくくゆえに何千年使続けても土地の地味はなくなる。

結論

勿論、全国の江戸時代に起こった環境保護運動の全てを本文で述べることは無理であるが前述の様に、存在したことは確かである。現代と違って、当時の社会は環境を維持していきやすい社会であった。明治時代になると、西洋の高成長社会がうらまやしくなって、環境のことなど気にせず全国的資源を使い果たした。環境を保護する意識も江戸時代のつらい経済的状況もなくなった。

参考文献

(1991/9) 現代農業「日本型環境保全の源流」農文協

安藤精一 (1992) 「近世公害史の研究」吉川弘文館

(6)

編集 組本社 (1991) 「大江戸万華鏡」 農文官

Edward Seidensticker (1985) "Low City, High City" Tuttle

Clive Ponting (1992) "A Green History of the World" Penguin

Ishi Hiroyuki (feb 1992) "Attitudes Towards the Natural World and the whaling Issue" The Japan Foundation Newsletter